

P2-490 閉経後の高脂血症者における介入の有無および方法による脂質代謝とPWV値の変化について

東京女子医大

吉形玲美, 大原麻美, 三雲美穂, 清水真弓, 宮原優子, 石谷 健, 岡野浩哉, 太田博明

【目的】前回の検討から高脂血症を有する閉経後女性のPWV値と脂質代謝において、TG高値およびHDL低値が動脈硬化の指標となる脂質プロファイルである可能性が示唆された。そこで今回我々は、血管系への直接作用を有するとされるHRTおよび脂質代謝介入による脂質代謝およびPWV値について検討を加えた。【方法】2004年1月から2005年8月の間、当科外来で高脂血症と診断された111例、平均年齢 57.17 ± 7.6 歳を対象とした。絶食時の総コレステロール(TC)、中性脂肪(TG)、LDL-C、HDL-Cを測定し、同時期にPWV測定をした。また対象者中のHRT施行18例のPWVと脂質代謝の関係を検討した。さらに脂質代謝介入後の経過を1.ライフスタイル、2.脂質低下薬、3.ラロキシフェン(RLX)の3群に分け比較検討した。【成績】HRT施行者のPWV値は 1308 ± 178 cm/s (mean $\pm$ SD)で未施行者の 1451 ± 218 cm/sに比し有意に低値で、また脂質代謝ではHDL-CにおいてHRT施行者で有意に低値を認めた(各 $p < 0.01$)。治療介入後6ヵ月の脂質代謝においてライフスタイル群ではいずれも有意差を認めず、脂質低下薬介入群ではTC、LDLで有意に低下を認め、RLX群ではTCが有意に低下を認めた(各 $p < 0.01$)。PWV値においてはいずれの群も有意な変化を認めなかった。【結論】HRTによる介入は動脈硬化抑制作用を有する可能性が示唆された。またPWVは動脈硬化のスクリーニング検査として有用であるが、介入6ヵ月では有意な変化は認められず、それ以上の観察期間を要することが判明した。

P2-491 中高年女性におけるうつ状態と動脈硬化性リスク因子に対するエストロゲン、選択的セロトニン再取り込み阻害薬併用療法の効果に関する検討

九州大

内田聡子, 田中義弘, 近藤裕子, 梅崎美奈, 中村博子, 野崎雅裕

【目的】中高年女性のうつ状態と動脈硬化リスク因子に対する結合型エストロゲン(CEE)と選択的セロトニン再取り込み阻害薬(SSRI)の影響を検討した。【方法】当科更年期外来に登録した心血管系疾患の既往がない39歳から66歳の子宮摘出患者65例を対象とした。抑うつ度はうつ尺度スコア(SDS, SRQ-D, STAI)で評価し、動脈硬化リスク因子はTC、TG、LDL-C、HDL-C、TC/HDL-C比で評価した。インフォームドコンセントを得た上で、42例にはCEE0.625mg/日とSSRI25mg/日の連日投与(A群)、23例にはCEE0.625mg/日の連日投与(B群)を行い、投与前、投与1, 3, 6, 12, 24ヶ月後のうつ尺度スコア、脂質プロファイルの推移をrepeated measure ANOVAで評価した。 $P < 0.05$ を統計学的に有意とした。【成績】SDS高値群においてTC、TC/HDL-C比は他の2群に比し高い傾向にあった。治療開始後A群はHDL-Cの上昇、TC/HDL-C比の低下を認め、B群では変化がなかった。両群とも治療開始後TC、LDL-C、SDS、SRQ-D、STAI-1、STAI-2の値は低下したが、2群間での差は認めなかった。【結論】中高年女性において、抑うつ状態が顕著であるほど動脈硬化リスク因子が高いこと、CEEとSSRIの併用療法はCEE単独療法に比しうつ状態を改善し動脈硬化性リスク因子を低下させることが示唆された。更年期障害等でうつ状態を呈する女性は動脈効果リスクが高いことを視野にいたした治療を行うことが重要である。

P2-492 長期間のホルモン補充療法における各種動脈硬化指標の推移

獨協医大越谷病院

濱田佳伸, 矢追正幸, 友部勝実, 安藤昌守, 堀中俊孝, 榎本英夫, 大藏健義

【目的】今回我々は、長期ホルモン補充療法を受けている患者の各種動脈硬化指標の推移について検討した。【方法】インフォームド・コンセントを得た上で結合型エストロゲン(以下、CEE)0.625mg投与を受けている患者14名(CEE0.625群、 59.4 ± 4.0 歳、平均HRT期間 7.1 ± 2.5 年)とCEE0.3125mg投与を受けている患者14名(CEE0.3125群、 62.7 ± 5.4 歳、平均HRT期間 5.5 ± 2.7 年)とHRTを受けていない患者14名(コントロール群、 58.6 ± 3.8 歳)と新規にCEE0.625mgのHRTを開始した患者10名(新規HRT群、 55.8 ± 4.0 歳)を対象とし、観察開始時、6ヵ月後、12ヵ月後の高感度CRP(hsCRP (ng/ml))、リポ蛋白質a(LP(a) (mg/dl))、ホモシステイン(homo (nmol/ml))、トータルPA-II(t-PA (ng/ml))を測定し、比較検討した。また、CEE0.625mgを投与されていた16名(56.5 ± 6.8 歳、平均HRT期間 6.9 ± 4.9 年)に対し、エストロゲンパッチ剤(パッチ群)に変更し、変更前と変更6ヵ月後のhsCRP、LP(a)、homo、t-PAを測定し、比較検討した。【成績】1) 観察開始6ヶ月及び12ヶ月のCEE0.625群のhsCRPはCEE0.3125群、新規HRT群に対し有意に高かった(6ヶ月: 1729.1 ± 1922.2 vs 381 ± 232 , 446.6 ± 493.0 , $p < 0.05$, 12ヶ月: 1446.2 ± 1424.7 vs 462.5 ± 211.6 , 327.3 ± 291.4 , $p < 0.05$)。2) パッチ群のhsCRPとLP(a)は変更前後で有意な低下を認めた(1226 ± 1390 vs 539 ± 438 , $p < 0.05$, 17 ± 17 vs 15 ± 15 , $p < 0.05$)。【結論】CEE0.625群のhsCRPはCEE0.3125群及び新規HRT群に比べて有意に高かった。また、パッチ群はhsCRPとLP(a)の有意な低下を認めた。CEE0.3125mgとエストロゲンパッチ剤の動脈硬化に対する安全性が示唆された。